柚ノ木A遺跡2

―1次調査―

福岡県春日市岡本所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第64集

2012

春日市教育委員会

柚ノ木A遺跡2

―1次調査―

福岡県春日市岡本所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第64集

2012

春日市教育委員会

序

本市の中央部に南北方向にのびる春日丘陵とその周辺の一帯には、多くの遺跡が確認されています。特に弥生時代の遺跡は、須玖岡本遺跡を中核として濃密な分布を示しており、その範囲は南北２㎞、東西１㎞に達することがわかっています。この遺跡群は須玖遺跡群と呼ばれ、王墓の発見や出土する青銅器生産関連遺物の質や量が他を圧倒するため、奴国の王都ともされています。

ここに報告いたします柚ノ木Ａ遺跡（１次調査）は、須玖遺跡群の一角を占める遺跡で、春日丘陵上に立地しています。周辺での調査例が少なかったために遺跡の詳細については明らかになっていませんでしたが、今回の調査では弥生時代中期～後期の集落跡を確認することができました。

貴重な遺跡の発掘調査報告としましては、本書の不十分さは免れませんが、研究資料として末永く活用され、また、一般の方々にも広く活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査や整理作業に当たりまして、御協力・御指導を賜りました多くの方々に深甚の謝意を表します。

平成24年３月31日

春日市教育委員会
教育長　山　本　直　俊

例　　言

1．本書は、平成11年度に春日市教育委員会が実施した駐車場建設に係る造成工事に伴う柚ノ木Ａ遺跡１次調査の緊急発掘調査の報告書である。

2．遺構の実測は、平田定幸が行い、製図は伊東ひかりが行った。

3．遺物の図作成は、平田・川端美由紀・造隼いずみ、製図は柳智子・島津屋幸子・久家春美が行った。

4．掲載写真のうち遺構については平田が撮影し、遺物は岡紀久夫（文化財写真工房）に撮影を委託した。

5．本書に使用した２万５千分の１地形図は、国土地理院が発行した『福岡南部』である。

6．本書の遺構実測図に用いた方位は、磁北である。

7．本書の執筆は平田の協力を経て、井上義也が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査の組織……1

Ⅱ　位置と環境……2

Ⅲ　調査の内容……5
1．調査の概要……5
2．遺構と遺物……6
（1）竪穴住居跡……6
（2）土坑……9
（3）その他……10

Ⅳ　まとめ……12

図 版 目 次

図　版　1　　柚ノ木A遺跡周辺航空写真
図　版　2　（1）　柚ノ木A遺跡調査区全景（南西から）
（2）　柚ノ木A遺跡調査区東半分（南西から）
図　版　3　（1）　1号竪穴住居跡（北西から）
（2）　2号竪穴住居跡（南西から）
（3）　土坑（西から）
図　版　4　（1）　2号竪穴住居跡土器出土状態①
（2）　2号竪穴住居跡土器出土状態②
（3）　包含層土器出土状態
図　版　5　　柚ノ木A遺跡出土土器
図　版　6　　柚ノ木A遺跡出土石器・ガラス小玉

挿　図　目　次

第１図　柚ノ木Ａ遺跡周辺遺跡分布図……3
第２図　柚ノ木Ａ遺跡位置図……4
第３図　柚ノ木Ａ遺跡１次調査遺構配置図……5
第４図　１号竪穴住居跡実測図……6
第５図　２号竪穴住居跡実測図……7
第６図　２号竪穴住居跡出土土器実測図……7
第７図　柚ノ木Ａ遺跡出土石器実測図……8
第８図　１号土坑実測図……9
第９図　１号土坑出土土器実測図……10
第10図　包含層出土土器実測図……10
第11図　ガラス小玉実測図……11

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

平成11年９月８日に代理人をとおして当該地の地権者から駐車場建設工事に係る文化財事前調査の依頼書が文化財課に提出された。当地は畑地として利用されていたために地形は大きく改変されないまま残存していると推測された。

平成11年９月８日に重機による試掘調査を実施したところ、現地表から15cmまで耕作土があり、その下に黄褐色土の地山面を確認した。地山面には対象地の東1/3に住居跡と思われる土坑やピットを検出したが、西側はすでに削平を受けており明確な遺構を確認することはできなかった。このため造成工事により遺跡が破壊を受ける対象地の東側を緊急発掘調査することとなった。

発掘調査は、地権者の同意を得て平成11年10月１日から市の単独事業として実施し、１ヶ月後の11月１日に終了した。

なお、遺物の整理作業及び報告書作成は、平成23年度を中心に行った。

2．調査の組織

発掘作業および整理作業における調査体制は下記のとおりである。

発掘調査（平成11年度）

教育長		河鍋　好一
教育部長		柴田　利行（４月～12月）
		岡本　嘉彦（１月～３月）
文化財課長		井上　武美
管理担当	課長補佐	桑野　浩行
	事務主査	増永　睦司
	事務主査	北島　公則
	事務主任	十時　弘之
文化財担当	係　　長	丸山　康晴
	技術主査	平田　定幸
	技術主任	中村　昇平
	技術主任	吉田　佳広
	技術主任	森井千賀子
	技術主任	境　　靖紀
	嘱　　託	池田　正大
	嘱　　託	井上　義也

報告書作成（平成23年度）

教育長		山本　直俊
社会教育部長		古賀　俊光
文化財課長		廣瀬　貴之
管理担当	課長補佐	平田　定幸（～４月）
	主　　査	増永　睦司
	主　　任	山田ひとみ
	主　　事	佐伯　廣宣
文化財担当	統括係長	中村　昇平
	主　　査	吉田　佳広
	主　　査	森井千賀子
	主　　任	井上　義也
	嘱　　託	島津屋幸子
	嘱　　託	柳　　智子
	嘱　　託	上原　あい

Ⅱ　位置と環境

柚ノ木Ａ遺跡１次調査地は、春日市岡本４丁目100番１・２に所在する。

福岡平野は北に玄界灘と面しており、古来から東アジアへの玄関口として栄え、大陸や半島の先進文化が流入した地でもあった。また、このことは遺跡の発掘調査結果からも明らかで、多くの遺跡が確認され対外交流を示すような遺物も出土している。

弥生時代の遺跡は、平野を北流する御笠川、那珂川の周囲に存在する丘陵や台地の周辺を中心に数多く確認され、中国の史書に記された奴国の故地であることが、ほぼ定説になっている。

当平野の南深部に位置する春日市は、面積14.15㎢の都市であり、市の中央に所在する春日丘陵は、脊振山塊から北東へ派生する丘陵で、大小の谷が入り組むため形状は樹枝状をなす。柚ノ木Ａ遺跡は春日丘陵の一部に当たる東西方向にのびる小丘陵上に立地し、標高は34ｍ前後を測る。

当丘陵の北部及びその周辺には、弥生時代の遺跡が切れることなく約２㎞にわたり分布しており、一大遺跡群を形成している。この遺跡群を須玖遺跡群、または須玖岡本遺跡群と呼称している。須玖遺跡群は、須玖岡本王墓を代表とする厚葬墓と青銅器生産遺跡として全国的に著名な遺跡である。

須玖岡本王墓は春日丘陵北側の低地に向かう緩斜面に位置し、明治32年に偶然発見された。出土品は破片資料が多いが、後の研究によって中期末の甕棺墓に30面前後の前漢鏡、10本前後の青銅武器、ガラス璧や勾玉等多数の副葬品が納められていたことが分かった。しかも、この甕棺墓は周辺の地形や聞き取り調査によって、墳丘に単独で埋葬されていた可能性が強い。この後に行われた発掘調査でも、周辺地域から鉄器や青銅器、ガラス玉類を副葬する墳墓が確認され、王墓と同時期の墳丘を有す王族墓も調査されている。

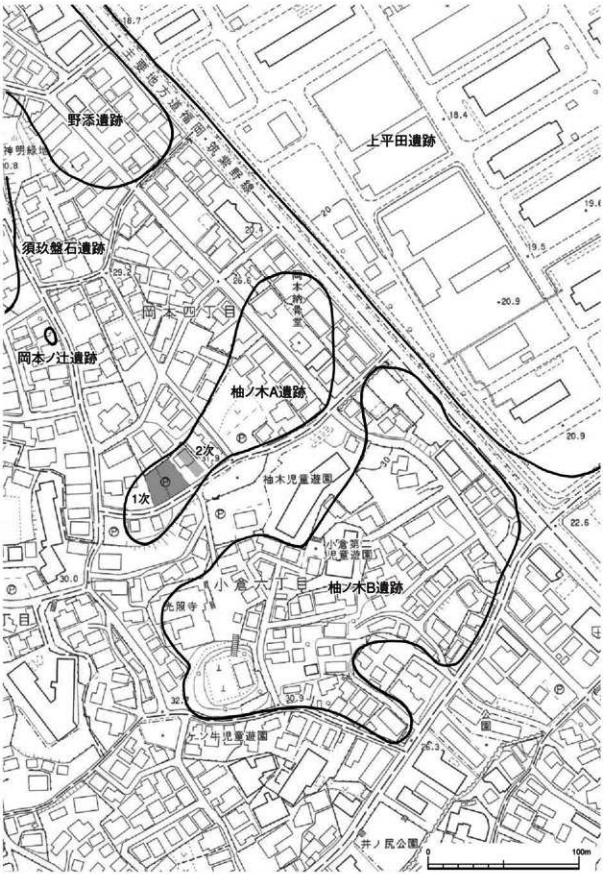
須玖岡本王墓から北へ約100ｍの位置には須玖岡本遺跡坂本地区が所在する。坂本地区は、青銅器生産遺跡で、確認された青銅器工房や青銅器生産関連遺物の質・量は他を圧倒し、「奴国の官営工房」とも称される。この他にも周囲には、須玖坂本Ｂ遺跡、須玖永田Ａ遺跡、須玖黒田遺跡等の青銅器生産遺跡やガラス工房が確認された須玖五反田遺跡が集中して分布する。

柚ノ木Ａ遺跡と須玖岡本王墓とは600ｍ程度しか離れていない。また、柚ノ木Ａ遺跡の周辺には大正時代に広形銅矛がまとまって発見された岡本ノ辻遺跡や集落跡と前・中期の墳墓が確認された平若Ａ遺跡が所在するが、当地周辺は開発が早かったために未調査のまま消滅した遺跡も少なくはないと考えられる。

いずれにせよ、当遺跡が須玖遺跡群の集落の一角を占める遺跡であったことは間違いない。

1 **柚ノ木A遺跡**	2 井尻B遺跡	3 三筑遺跡	4 仲島遺跡	5 横手遺跡
6 麦野C遺跡	7 日佐遺跡	8 須玖唐梨遺跡	9 須玖五反田遺跡	10 須玖永田B遺跡
11 須玖柚町遺跡	12 須玖黒田遺跡	13 須玖タカウタ遺跡	14 須玖岡本遺跡	15 須玖磐石遺跡
16 上平田・天田遺跡	17 赤井手遺跡	18 竹ケ本A遺跡	19 宮ノ下遺跡	20 大南A遺跡
21 大谷遺跡	22 立石遺跡	23 下大荒遺跡	24 南八幡遺跡	25 大荒遺跡
26 雑餉隈遺跡	27 弥永原遺跡	28 駅河A遺跡	29 上白水遺跡群	30 春日水城跡

第1図　柚ノ木A遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）



第２図　柚ノ木Ａ遺跡位置図（1/2,500）

Ⅲ　調査の内容

1．調査の概要

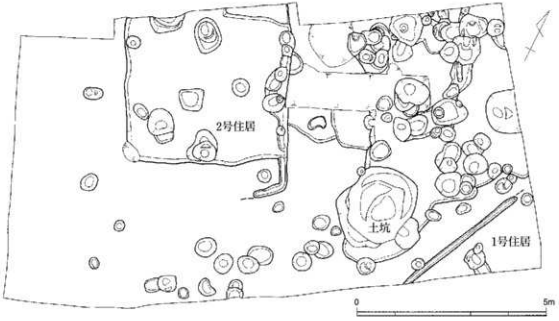
発掘調査の対象としたのは、試掘調査によって遺構の存在が明らかになった開発予定地の南東部103㎡で、全体の約1/6程度である。平成11年10月１日から調査を開始した。

すでに削平を受けて遺構が確認されなかった対象地の西側を掘削土等の置き場にするため、東側から重機で表土を除去しながら遺構検出作業を順次進めて行った。

畑の耕作土を15～20㎝除去すると黄褐色土の地山に掘り込まれた遺構が確認できた。遺構は住居跡２軒、土坑１基及び多数のピットがある。発掘調査から除外した対象地の西側の状況から、ある程度の削平は受けていると推察していたが、調査区東隅で検出した１号住居跡はかろうじて西壁の一部を残すのみで、調査区中央北西よりで確認した２号住居跡もベッド状遺構がわずかに残存するまで削平を受けていたため、消失した遺構は少なくないと思われる。

柚ノ木Ａ遺跡は、春日丘陵の東西方向にのびる小丘陵上に存在する遺跡で、１次調査地の現在の標高は34ｍ前後を測り、ここから東側に向かい緩やかに高さを減じている。遺構の削平を考えれば、本来は少なくとも数十㎝は高かったことが分かる。また、当調査地の西側は谷であったことが判明しており、遺跡は当地から東に向かって広がるものと考えられる。

遺構は調査区の北東部に集中するように見えるが、調査区が狭小なため断定はできない。１号住居跡は先述したように著しく削平を受け、西壁の痕跡を確認したのみである。床面には数個のピットが



第３図　柚ノ木Ａ遺跡１次調査遺構配置図（1/100）

見られるが、住居跡に伴うものかは明確でない。また、土器が殆ど出土せず、時期の決め手に欠ける。２号住居も削平を受けるが、出土した土器から弥生時代終末期の住居と分かる。１号住居跡と２号住居跡の間には、北に向かって緩やかな落ち込みがあり土器などが包含されていた。明確な遺構とは考えられず、地山面まで下げると土坑やピットが検出できた。なお、一部に炭化物や焼土が見られるが、性格については把握できなかった。土坑は、土器の底部が出土しており、弥生後期に帰属すると考えられる。

出土遺物は、弥生土器、砥石、ガラス小玉等整理箱４箱が出土した。弥生土器は中期～終末期のものが出土するため、当遺跡未調査区域には弥生時代中期～終末期の集落が存在する可能性が高い。

平成11年11月１日までに発掘作業、記録保存を終了した。

２．遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

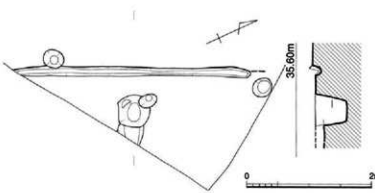
①　１号竪穴住居跡（図版３－(1)、第４図）

調査区西隅で検出した。当住居の大部分は調査区外にあたるため、全容は把握していない。また、遺存状態がきわめて悪く、辛うじて西壁の一部が残存するのみであった。壁高は数cmしかなかったが、東側直下に壁溝を検出することができた。壁溝は幅15cm前後で、床面からの深さは最深部で９cmを測る。床面には４つのピットが見られるが、当住居に伴うかは不明である。

出土遺物は、土器の小片が出土したのみで、時期は確定できなかった。

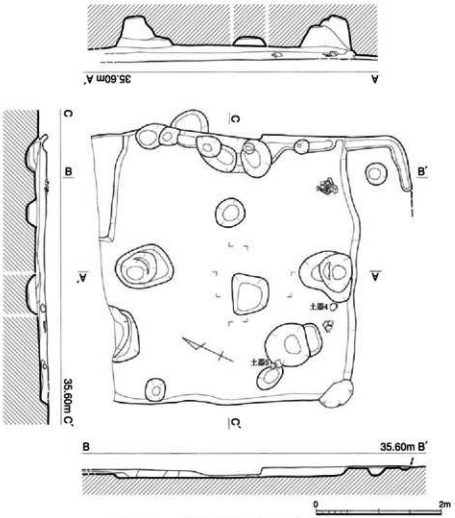
②　２号竪穴住居跡（図版３－(2)、第５図）

調査区中央部付近で確認した。全掘していないが、平面形は4.3m×5.5m程度の長方形と考えられる。北隅と南部にベッド状遺構を確認したが、削平のため残存状況は悪く、壁高は最も残りの良い部位で15cm程度である。床面には多数のピットを検出しており、主軸に乗る大形の２つのピットが主柱穴と考えられる。２つの主柱穴は段掘り状をなし、床面からの最深部の深さは50cm程度である。床面の中央付近には隅丸台形状をしたピットがあり、炉跡の可能性も考えたが、焼土や炭化物はない。



第４図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）

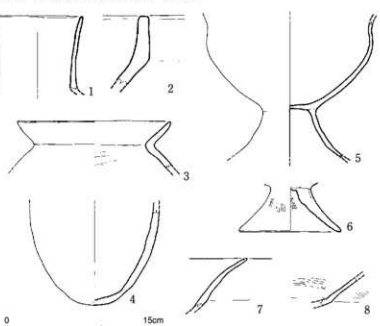
出土遺物は、土器の他に砥石が出土した。



第５図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）

土　器（図版５、第６図）

１は直口壺の口縁部で、残存状況から直下には体部が接合することが分かる。復元口径9.65㎝、内外面の調整は風化のため不明。色調は灰茶色を呈し、胎土は細砂粒を若干含む。２は複合口縁壺の口縁部片で、厚みがあるため大形品の可能性がある。風化のため内外面の調整は不明。色調は淡橙褐色で、胎土には粗細砂

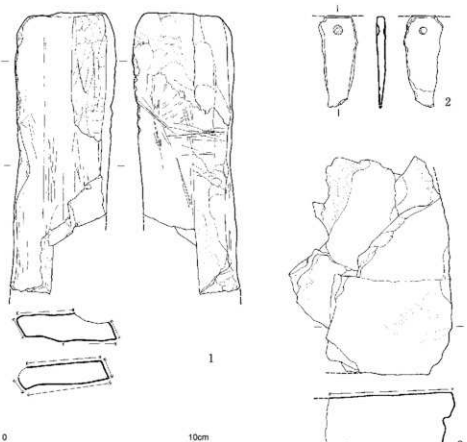


第６図　２号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

粒を多く含む。3は甕の口縁部片で、口径16.2cmに復元できる。内面にはヘラケズリを施すが、庄内式土器や布留式土器とは明らかに異なる。須玖唐梨遺跡等でも、弥生時代後期の甕の胴部内面にヘラケズリを施すものがあるため、この類の土器と考えたい。色調は淡橙褐色で、粗砂粒を多く含む。4は甕の下半部で、底部は僅かに凸レンズ状をなすが、丸底に近い。調整は内外面共にナデを施し、内底部は指頭痕が目立つ。色調は黄褐色を呈し、胎土に粗細砂粒を多く含む。5は脚台付の鉢で、1/2弱が残存する資料。残器高14.4cm、くびれ部径は5.7cmを測る。風化が著しく調整は不明。色調は黄褐色で、粗細砂粒を多く含む。6は脚台部の資料で、裾部は直径10.8cmに復元できる。器面の風化は著しいが、内外面にハケメが残存する。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒を殆ど含まず精良。上部には鉢等が接合していたのであろう。7は高坏の口縁部片。調整は風化が著しく不明。色調は淡橙褐色を呈し、胎土は砂粒を殆ど含まず精良。8は高坏の坏部小片。内外面共に屈曲部は明瞭で、調整はハケメが残存する。色調は赤褐色で、胎土は砂粒や雲母を含むも精良。

石　器（図版6、第7図）

1は青緑色を呈する粘板岩製の砥石。最大長14.8cm、最大幅5.6cm、厚さ1.55cmを測り、重量は145.2g。表裏面と両側面の4面を使用する。裏面は欠損後に再利用したためか、平滑ではない。また、金属器によると考えられる鋭い傷が観察できる。



第7図　柚ノ木A遺跡出土石器実測図（1/2）

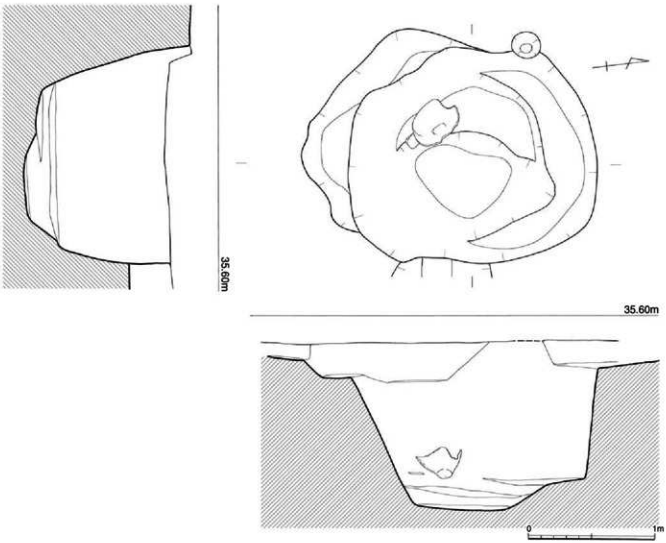
（2）土　坑（図版３－⑶、第８図）

１・２号住居の間に位置し、平面形は不整楕円形で、長軸は2.33mを測る。各所に段掘りが認められるが、北側が特に顕著である。壁面の傾斜は北・東・西壁が急で、南壁はやや緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦で、深さは1.31mを測る。

出土遺物は、遺構図に図化した弥生土器底部の他に弥生土器の口縁部片が出土している。

土　器（図版５、第９図）

９は甕の口縁部片。小片のため傾きには疑問がある。内外面の調整はナデ、色調は茶褐色で、胎土は砂粒を含む。10は大ぶりの甕の底部資料。底部は平底で復元径は11.2cm。外面は細かいハケメ、内縁はナデを施す。色調は黄褐色。胎土は粗細砂粒を含む。11は甕の口縁部片で、混入品と考えられる資料。上面はほぼ水平で、内端部はやや鳥嘴状に仕上げる。風化が著しく調整は不明。色調は赤褐色

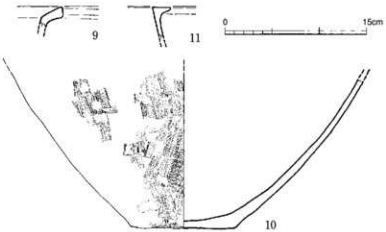


第８図　１号土坑実測図（1/30）

で、胎土は粗砂粒を含む。

（3）その他

調査区の中央付近から北西部には緩やかな落ち込みがあり、覆土を除去すると多くのピットが検出された。また、一部で炭化物や焼土等も確認したが、性格は明らかでない。

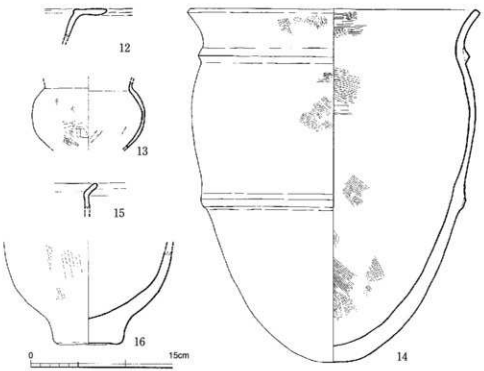


第９図　１号土坑出土土器実測図（1/4）

なお、覆土からは、土器、石器、ガラス小玉が出土するため包含層出土遺物として報告する。

土　器（図版５、第10図）

12は壺の口縁部小片。風化のため調整は不明である。色調は淡橙色、胎土は砂粒を含む。13は壺の体部で、最大径は12㎝を測る。外面の調整はハケメ後にミガキ様のナデを施す。内面は下半に工具痕を残す。色調は、外面は淡褐色、内面が黒灰色。胎土は、細砂粒を若干含むも精良。14は甕で、出土状態は完形品が潰れた状態であったが、小片が多いことや磨滅が著しいことから、全体の1/2程度しか復元できなかった。口径30.9㎝、器高37.3㎝を測り、底部は丸底に近く、口縁下に三角突帯、胴部



第10図　包含層出土土器実測図（1/4）

に低い台形突帯を一条ずつ貼り付ける。調整は、内外面が風化のために剥離し、残りは悪いが、ハケ目が残存する。色調は赤褐色、胎土は粗細砂粒が目立つ。15は小ぶりの甕の口縁部小片。調整はナデ、色調は赤褐色を呈し、胎土は粗細砂粒を含む。16は甕ないし壺の底部。平底で、厚みが顕著なため、在地の土器ではない可能性がある。外面の調整は、胴部がハケ目で、底部付近はナデ。内面はナデを施す。内外面ともに暗褐色を呈し、胎土は粗細砂粒を含む。

石　器（図版６、第７図）

２は石包丁の未成品と考えられる破片資料。残存長4.8㎝、残存幅2.1㎝で、重量は6.7ｇ。石材は黄灰色を呈する頁岩質の石。上部には両面からの穿孔が見られるが、貫通はしていない。３は頁岩質の砥石で、残存長8.55㎝、残存幅11.45㎝、厚さ3.0㎝、重量は304.9ｇである。表面は砥石としてよく使用されるが、裏面は一部のみで使用が確認できる。

ガラス小玉（図版６、第11図）

コバルトブルーを呈するガラス小玉で、外径5.5㎜前後、孔径2.5㎜前後、厚さ5.5㎜、重量0.2ｇを測る。孔に平行する気泡列が見られることから、本資料が引延し技法により成形されたことがわかる。

第11図　ガラス小玉 実測図（1/1）

Ⅳ まとめ

春日丘陵北部及びその北の低地は、弥生時代中～後期の集落や墳墓が稠密して確認されるため、一つの遺跡群として捉えることができる。この遺跡群は須玖遺跡群と呼ばれ、柚ノ木Ａ遺跡は当遺跡群の中央部付近に所在する。当地は、春日丘陵にある東西方向にのびた小丘陵で、１次調査地の西側20ｍ地点は、試掘調査の結果から谷ということが明らかになっている。

このため、１次調査地は、柚ノ木Ａ遺跡の西端部付近と考えられる。１次調査地は標高34ｍ程度で、現状の地形は東に向かい緩やかに下がっており、遺跡も東側に向かい広がると推測できる。柚ノ木Ａ遺跡の範囲を旧地形から復元すると、１次調査地から北東方向に200ｍ×70ｍ程度範囲で広がっていたと考えられる。なお、大正時代に広形銅矛がまとまって発見された岡本ノ辻遺跡は、当遺跡から北に110ｍの地点である。

１次調査地は畑として利用されていたため、試掘調査以前はさほど削平されてはいないだろうと考えていた。しかしながら、竪穴住居跡の壁面が殆ど残らないほど削平を受けていたために、完全に消滅した遺構は少なくはないと考えられる。今回の調査で調査した遺構は、竪穴住居跡２軒、土坑１基、ピット多数である。

１号住居跡は、住居の西壁と壁溝を検出したのみで、時期を示すような遺物も出土していない。２号住居跡も削平のため残存状況は良くなかったが、２ヵ所でペット状遺構を確認し、主柱穴と考えられるピットを検出することができた。出土した土器から弥生時代終末期の竪穴住居と考えられる。
土坑は、大ぶりの甕の底部や甕の口縁部から考えて後期前半であろう。なお、土坑の上には包含層が確認された。遺構のような明瞭な掘り込みがなく、平面形も歪である。弥生土器が出土し、その中には完形品に近い甕も含まれる。

なお、東側隣地では２次調査が実施された。既に報告済みのため詳細は触れないが、弥生時代や古墳時代の住居跡が調査されている。また、調査区の北側は丘陵の斜面にあたり、ここには多くの弥生土器が包含されていた。さらに、樹根の除去時のため表土であるが、青銅器鋳型片も出土している。古墳時代の住居は、ほぼ完掘することができた。注目されるのは、須恵器、土師器と共に陶質土器が出土している点である。

以上のように１次調査と２次調査の結果から、柚ノ木Ａ遺跡は、弥生時代から古墳時代までの遺跡と考えられる。弥生時代については、遺構や包含層から出土する土器から考えて、中期前半から終末期まで連続する遺跡である可能性がある。古墳時代については、遺構、遺物が限られるために一概には言えないが、断続的に集落が営まれた可能性がある。

図　　版

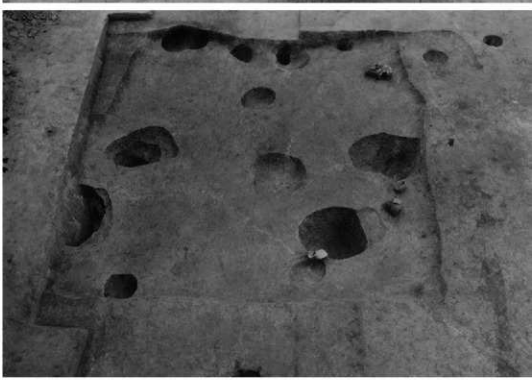
柚ノ木A遺跡周辺航空写真

柚ノ木A遺跡周辺航空写真

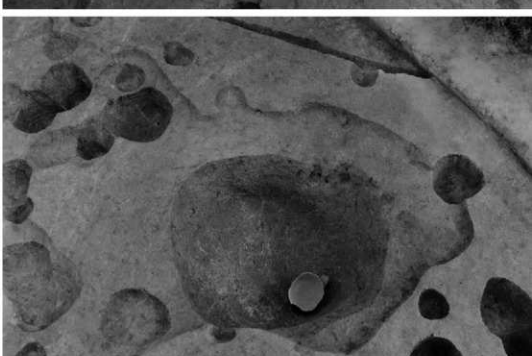
（1） 柚ノ木A遺跡調査区全景（南西から）

（2） 柚ノ木A遺跡調査区東半分（南西から）

（1）1号竪穴住居跡（北西から）



（2）2号竪穴住居跡（南西から）



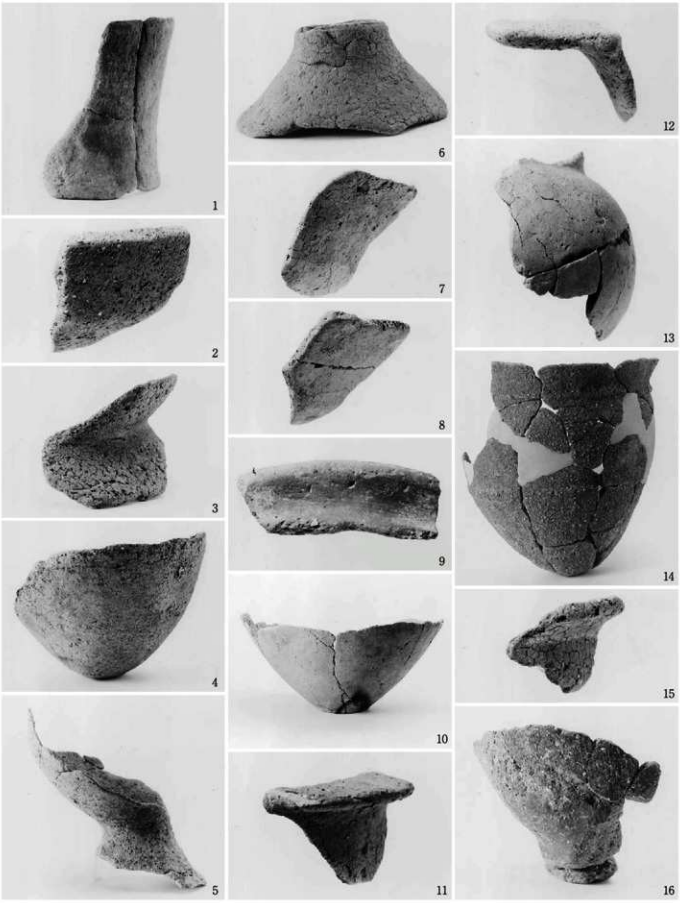
（3）土坑（西から）

図版4

(1) 2号竪穴住居跡土器出土状態①

(2) 2号竪穴住居跡土器出土状態②

(3) 包含層土器出土状態



柚ノ木Ａ遺跡出土土器　２号竪穴住居跡（１～８）　１号土坑（９～11）　包含層（12～16）

柚ノ木Ａ遺跡出土石器・ガラス小玉

報告書抄録

ふりがな	ゆうのきえーいせき
書名	柚ノ木A遺跡
副書名	福岡県春日市岡本所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第64集
編著者名	井上義也
編集機関	春日市教育委員会
所在地	〒816－8501　福岡県春日市原町３丁目１番地５　℡　092－584－1111
発行年月日	西暦2012年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
柚ノ木A遺跡（ゆうのきえーいせき）	福岡県春日市（ふくおかけんかすがし）岡本４丁目100番（おかもと　ちょうめ　ばん）１・２	40218		33°32′41″	130°26′57″	1999.10.01～1999.11.01	103	駐車場建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柚ノ木A遺跡	集落	弥生	竪穴住居跡　２軒 土坑　１基	弥生土器	須玖遺跡群の中央付近に位置する弥生時代の集落

要約	弥生時代、奴国の中枢であったと推定される須玖遺跡群の中央部に位置する集落跡で、東西にのびる小丘陵上に立地している。須玖岡本王墓から南東へ600mの位置にあり、近隣には大正時代に広形銅矛９本が一括出土した岡本ノ辻遺跡が所在する。今回の発掘調査は、面積も狭く、削平も受けていたために遺構の残存状態は良好とはいえないが、竪穴住居跡２軒、土坑１基と多数のピットを調査することができた。

柚ノ木A遺跡 2
―1次調査―
春日市文化財調査報告書
第64集

発行日　平成24年3月31日
発　行　春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5
印　刷　株式会社　昭和堂　九州支店
福岡県福岡市博多区東比恵4-2-10